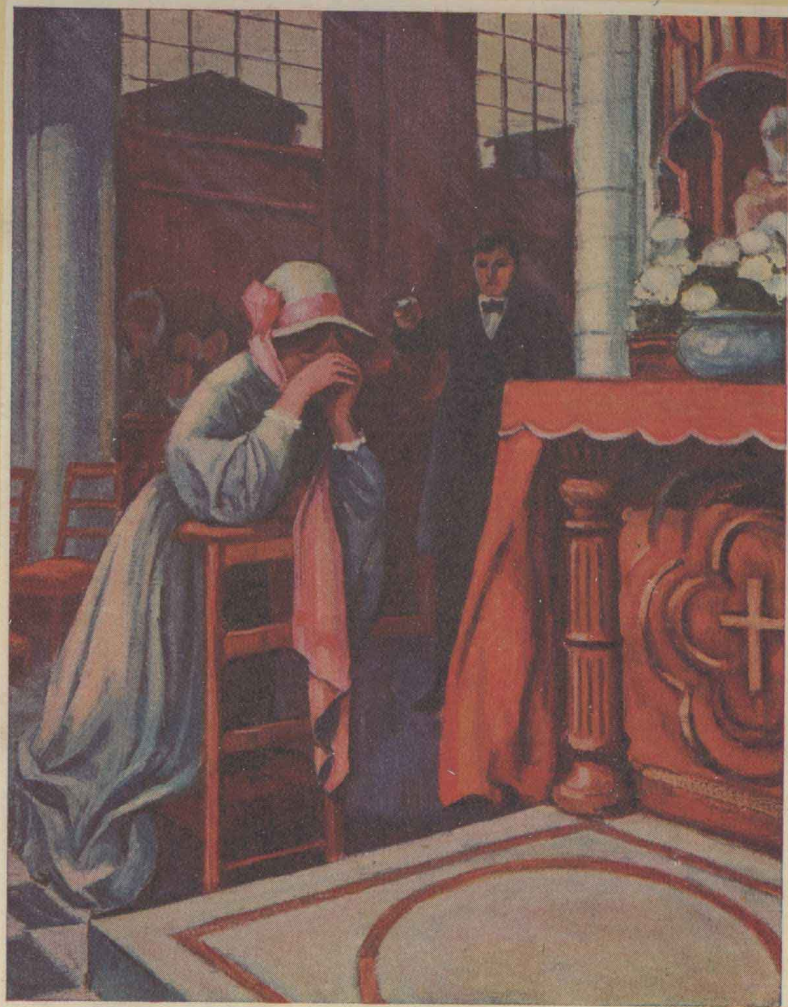




LE ROUGE ET LE NOIR

Standhal

著 ルーダントス

黒 と 赤

譯 丸 孝 木 々 佐

版 出 社 潮 新

第二期

世界文學全集(4)

赤と黒

第五同配本

昭和五年九月廿五日印刷
昭和五年十月一日發行

翻譯者 佐々木孝丸

發行者 佐藤義亮

東京市牛込區矢來町

發行所 新潮社

電話牛込

八八八八八
〇〇〇〇〇
九八七六五
番番番番番

振替東京 二三、四五〇番

解 說

佛蘭西も伊太利の國境に近いドオフィネ地方の中心都會グルノーブルの町に、司法官シエリユバン・ペイルの子として、一七八三年スタンダアルは生れた。スタンダアルは筆名で本名はアンリ・ペイルである。母親が若くして逝つた後は、祖父の許で育つたが、父は恐しく嚴格な人だつたさうである。よその子供と自由に遊ぶことさへ禁じられたアンリは、自然書物と親しむやうになつた。

一七八九年には佛蘭西大革命が起つた。つまり彼は革命の中で育つた譯である。三年の公立學校を終へたが、その間も相變らず文學書の耽讀をやめなかつた。それから工科學校へ入る目的で、巴里へ出かけたが、親戚のダリユー家に居つて、工科學校にも入らず、遊蕩をはじめた。

その後ナポレオンに従つて伊太利遠征にも行つたが、やがてそれも斷念し、各地を轉々して、文筆を操つてみたり、役者になりかけてみたり、商賣をはじめてみたり、女に惚れてみたりしたが、結局また巴里へ歸つて再び軍隊へ入つてナポレオンの部下になつた。だがその間にも、巴里にあつて、サロンへ出入してゐた。

かの有名なモスコオ焼拂ひの慘事は、彼もまたナポレオン軍隊と共に味つてゐた。

——しかしやがてナポレオンは流されてしまつた。野望を抱いたスタンダアルも、もはや軍人の光榮を夢みることは出来なくなつた。それと共に親戚のダリユー家の後援もなくなつてしまつた。その間、女を愛したり、裏切られたり

しながら、『音楽家評傳』、『伊太利繪畫史』などを出版した。

巴里へ出ると共に、彼の社交兒としての生活がはじまつた。その間に出版されたもののうちに、有名な『戀愛論』をはじめ、『ロシニ傳』、『ローマ散策記』などがある。彼がスタンダルなる筆名を用ひはじめたのは、この『ローマ散策記』からである。その後外交官となつて、伊太利に領事として滞在してゐたが、勝手に巴里へ歸つて來てメリメなどの交りも出來たのであつた。

が一八四二年、遂に病んで逝つた。

佛蘭西文學史を繙くものが必ずお目に掛る作家であり、現代の佛蘭西人の間には全くポピュラになり切つてゐる作家であつて、しかも生前、その當時の「文壇」からは全く孤立した立場にゐた作家がある。それは、スタンダルとメリメだ。作品の上では、スタンダルは全く「文壇」と没交渉であり、人としては彼は全く「文壇人」と没交渉であつたのだ。彼が「少數」の讀者を目標として作をしてゐた氣持も、こんなところから窺つて窺へぬことはない。

『赤と黒』でも、彼はその目次の終りへ持つて行つて、*To the happy few*（幸福なる少數の人に）などと云ふ文句を、わざ／＼英語で書き入れてゐる。面白いことに、彼が豫言した一八八〇年頃の彼の愛讀者達は、「スタンダルは、生前にはちつとも成功しなかつたに違ひない」といふ、同情的斷定を下したものださうだ。ところがこの斷定は、全く正鵠を得てゐるとは云へない。無論、生前の彼は大きいポピュラリティといふやうなものを贏ち得ることは出來なかつた。彼の作品の周圍には、たゞ少數の愛好者があつただけで、「旬日にして忽ち何版」とか、「何萬部賣切」とかいふやうな、商品的榮耀は、彼の生前にはどの作も擔つたことがなかつた。然し、彼の作品は、當時の傑れた鑑識眼を

持つてゐる人達には常に讀まれてゐたし、且つそれに就いての議論が聞はされてゐた。そして又、彼の作品に就いての長い批評も屢々行はれた。

さうした少い讚美者達の中で、彼に對する諍辭を勇敢にジャスティファイし、表明することを惜しまなかつたものが二人ある。一人はプロスペール・メリメ(Prosper Mérimé)や一人はオノレ・ド・バルザック(Honoré de Balzac)である。

スタンダールがメリメに與へた直接的な影響は、どうしてもこれを見逃すことが出来ない。例の『カルメン』の作者メリメが、やゝもすると乾燥無味に陥り易い程にまで深く細かく這入つて行つたのは、恐らく、スタンダールの流儀に負つたものと云はねばなるまい。然しながら面白いことに、メリメはスタンダールより二十歳も年少者であつたのだが、この二人の交際は、文學的共鳴による交りと云ふよりも、寧ろ人としての親しい交情であつたらしい。スタンダールが、このずつと年下の友人に與へた幾つもの手紙の中には、この若い友人を、第一流の文學者として取り扱つてゐるやうな文字が、隨所に書かれてある。

この二人の變人は、お互に相手を疑ひ合つたり、業を煮やし合つたりしてゐたのだ。さうしないではゐられなかつたのだ。又さうすることによつてこの二人はお互の叡智を磨き合ひ、お互に新たな悦びを見出し合つてゐたのだ。猜疑の上に立脚した友情、自分を馬鹿にされやしないかと常に怖れてゐた親交、さうした感情こそは、「憎みの上に立脚した愛」を描くことに傑れた手腕を持つてゐたこの二人の作家にとつて、極めて當然なことであつたのだ。讀者は、『赤と黒』の主人公ジュリアン・ソレルと第二の戀人マチルドとの愛が、階級的憎しみの上に立脚してゐることを、つまり征服愛であつたことを認めるであらう。メリメの『カルメン』に於てもカルメンがホセを愛するに到つた最初の出發點には憎しみがある。ところで、スタンダールもメリメも當時の文壇からは全く孤立した立場に立つてゐた。

そして殆んどあらゆる勢力を集注してゐたロマンチズムのグループともほんの僅かな交渉しか持つてゐなかつた。

そんな關係から、當時のロマンチスト達はこの二人に對して何等の同情も讃辭も與へなかつた。彼等のうちの大部分の者は、特に、スタンダルを輕蔑してゐた。偶々彼に注意を向けるものも、彼を愛しようとはしなかつた。アルフレッド・ヴィニイ(Alfred de Vigny)などは、未だ浪漫派に屬してゐた時代に、スタンダールの最初の傑作『バルマの僧院』が現はれるとすぐ讀んだものであるが、「屑籠へ投げ込むべき」小説であると思つた。そして、「この小説は、外交界のことを細かく觀察してあるといふだけのことで、少しも深い思想がない。」と斷定した。

スタンダルは、一般からのかうした敵意ある冷淡に對して、微塵もいぢけた氣持をば起さなかつた。彼は何處までも陽氣なエビキュリアンであつたのだ。文學上に於ける讚美は、「類似の證書である」といふ一面の眞理は、スタンダルによつて始めて云ひ表はされたものであると云つてもいゝくらゐだ。彼は浪漫主義者等に似てゐなかつた。そして似てゐないことを喜んでゐた。

かうした狀態のうちに、文壇の主流は段々浪漫主義(Romantisme)から自然主義(Naturalisme)へと推移して行つた。浪漫派の作家及び批評家から、それ程にまで冷遇されたスタンダルが、新しい主義に立脚したナチュラリストの一派から如何に見られたか？ これは興味ある問題であらねばならぬ。

「藝術的」文體、殊に物の表現法——文章——のことをやかましく云つたフローベルは、勢ひ惡文家のスタンダルを嫌つた。然し、彼以外のナチュラリスト達は、スタンダルを以て彼等の流派の鼻祖であるときでかつきあげた。この意味からして、最も良くスタンダルを研究し解剖し、且つ叮嚀に批判したのはエミール・ゾラである。

ゾラは、自分の周圍の門下生達の間で、スタンダルが非常に讚美せられてゐるのを見て、『實驗小説』といふ一文

を草した。彼はスタンダルを拉し來つて、この新しい流派(ナチュラリズム)の先驅者中の一人にしようと試みたのだ。この努力は蓋し、さう容易なものではなかつた。

ゾラがその自然主義的觀察眼を以て、このイデオロジストたるスタンダルを自然主義的に觀ようとするのは、かなり困難な仕事であつた。がゾラはその困難をごまかして怪し氣な手品を使ふやうなことはしなかつた。彼は飽くまでも解剖家として、觀察家としての科學者らしい態度でこれに向つた。ゾラの見るところでは、スタンダルは、觀察家であるよりも、遙かに多く論理家であつた。即ち彼によれば、スタンダルはバルザックと正反對の立場に立つてゐたのだ。彼は云ふ。

「私の見るところを以てすれば、スタンダルは、論理の力を借りて眞實へ達する爲めに先づ觀察から出發する觀察家ではない。彼は論理そのものから出發して、屢々一足飛びに觀察を飛び越えて眞實に達する論理家である。」

如何なる場合にも、一々克明に觀察の階段を踏んで行かなければ承知の出來なかつたゾラには、スタンダールのこの一足飛びの論理が氣に喰はなかつた。が、それよりもつとゾラを不快にさせたのは、スタンダルが、魂を解剖することばかり氣を奪はれて、肉體の方面を忘れることであつた。魂の描寫をやらうとして、その魂が感覺と環境に結び付いてゐるのを忘れることであつた。つまりスタンダルは、「空虚うつろの中で魂だけを動かして」ゐたと云ふのだ。そしてそれは「心理的機械であつて、人生の相ではない」と云ふのだ。

かく説いて來てから、ゾラは『赤と黒』の中から一例を引いて自説を進めてゐる——

『赤と黒』の中に一の有名な挿話がある。或る樹の枝が黒く繁り合つた蔭で、ジュリアンがレーナル夫人の傍に腰を下ろし、そして夫人がデルヴル夫人と話してゐる間に、その手を握らうとする一場面である。この場面は大きな力か

ら出た小さな一默劇である。そしてスタンダルはこの時の二人の人物の心理状態を驚嘆すべき程巧みに描き出している。然るにその環境の事はたゞの一語も描かれてない。讀者たる吾々は唯周圍が暗いといふ一事だけで、その事件を何處へ持つて行かうと、どのやうなコンディションの下へ置かうと、結局同じ場面を見られる譯である。

この説明はかなり意味深い面白いものだ。ゾラは、これだけの言葉で以て、スタンダルと彼自身との間の創作的態度を隔てゝゐる差違を、巧みに示してゐる。それだけに又ゾラはスタンダールの「天才的事業」を讚美すべき理由を見出すに困つた譯である。が然し彼は遂に、スタンダールのこの「天才的事業」は、「屢々心理解剖家のメスを振つて——時には實に不完全な、時には實に系統的なメスを振つて、獲得したところの眞實味の強度の裡にその價值がある」と宣言するにいたつた。それは確かに何物かである。然しそれだからと云つてスタンダールの描いた人物が、バルザックのそのやうに「肉と骨とをつけた」ものでなく、たゞ「智的な情熱的な機械」に過ぎないことを、又その人物が「偏頭痛を病んでゐるんぢやないかと思はれる程、脳髓ばかり働かせてゐる」ことを、更に「彼の小説が頭の所産であり、哲學的方法によつて元素化された人間の所産である」ことを妨げることは出来ない。かう云ふ調子でぐんぐん説を進めて行くゾラの態度は、明らかに、スタンダルを讚美するよりも非難してゐるやうに見える場合が多い。スタンダルは確かに、一面に於て自然主義の遠い恩人であると共に、一面に於てどこまでも觀念派の作家として自然主義と相容れないところを持つてゐるのだ。

ゾラがこの一文を發表してから三年後に、ポール・ブルジェ(Paul Bourget)が、その『現代心理小論集』の第五集をスタンダル研究に當てゝゐる。この研究論文に於てブルジェは、スタンダールの奇妙な性癖を縱横に批判し解剖した後、近代文學に於ける最も著しい二つの特徴を最初に表明したものはスタンダルであると斷じてゐる。その二つの

特徴といふのは、即ち解剖精神 (l' esprit d' analyse) と超國境主義 (Cosmopolitisme) とである。

然しながらブルジュもやはりゾラと同じく、この「自然主義の遠い父」を自分達の同じ仲間に取り込むべく、かなり無理とこぢつけとをやつたものと思はねばならない。何故ならば、スタンダルが理解し使用してゐたところの「解剖」といふものは、ソラやブルジュが云ふやうな意味に於ての「解剖」即ち鋭い冷たい科學者的メスを振ふ意味ではなかつたからである。

ブルジュは又、その『小論集』の中で、更に云つてゐる。「若しも戀に關するスタンダールの言葉を聞かなかつたならば、一生涯餘り熱烈な戀をしなかつたものが澤山あるかも知れない。」それ程スタンダルは「偉大な觀察家」であつた。そして「今の作家達が彼を讀まなかつたならば、彼等は確かに、彼等が發表してゐる作品とは全く違つた様式で戀愛を描いてゐるだらう。」

ブルジュの傑作『弟子』(Le Disciple) の如きは、『赤と黒』の姉妹篇と云つても良い程である。彼が「時代精神の本質に依つて描き出し」「作者の個性によつて創造した」と稱する『弟子』の主人公ロベール・グレルーは、『赤と黒』の主人公ジュリアン・ソレルの弟であり、幾らか平凡な、弱々しい男になり下つたジュリアンであると云つても過言ではない。單に主人公の性格ばかりではなく、瑣末な言葉の端々^{はしこ}に到るまで、この『弟子』には『赤と黒』を想はせるものが多分に含まれてゐる。例へば弟子のロベール・グレルーは、その日記の中で、「俺は彼等と餘りに違ひ過ぎてゐるやうな氣がする。彼等との違ひ——一言で云ふならば、俺には彼等のあらゆることが分るのだが、彼等には俺といふ人間を理解することが出来ない。」と云つてゐる。スタンダルは「ジュリアンは……を悦ばすことが出来なかつた。彼は餘りに違ひ過ぎてゐた。」と書いてゐる。見給へ、この二つの「違ひ過ぎてゐる」と云ふ言葉は、共に主人公の優越感を

示す爲めに、同じやうな場所へ用ゐられてゐるではないか。

以上のやうに様々な角度から眺められた作家としてのスタンダールの精髓を窺つてゐるものは、言ふまでもなくこの『赤と黒』の一篇なのである。外に『バルムの僧院』なる小説が一篇あつて、同じくスタンダール流の傑作ではあるが、その結構から見ても力から見ても、まづ彼の代表作は『赤と黒』といつて差支へなからう。

では、その『赤と黒』に於いて、この問題の作家、ロマンティストよりはナチュラリストに好かれ、心理解剖に秀でたスタンダールは一體何を書いてゐるか？ 一言で盡せば、闘争的な熱情を、である。愛情と憎惡の渦卷である。しかもそれら二つともが、人力でなし得られる限りの最高温度で沸騰してゐる。

一篇の骨子は、木挽の子と生れながら、拔群の才智と美貌をもつたジュリアン・ソレルなる青年の、血みどろな惡戦苦闘史なのである。金もなく地位もない一田舎者の小作が、自分たち平民の頭上に、無知と饒舌と追従と暗愚とを以てのさばり返つてゐる特權階級——貴族とそれに追隨してゐる成上り者——に對する闘争なのである。スタンダールはこの『赤と黒』に於いて、階級の闘争を裏へかくしてゐる。だから人々の眼は、主人公ジュリアンがたゞ一箇の、根據もなく天から降つて來た野心家だと見誤るかも知れない。だが、ナポレオン失脚當時の新しく展開して行く社會の情勢に尻を押してもらはずには、只一箇の野心家がこれほど組織だつた憎惡を敵の階級に向つて投げつけ得るはずはない。彼のこの闘ひは小さなものを征服してだんだん強力な敵を向うにまはし、遂には首都巴里で、當時の最も強力な貴族を相手にしてゐる。第一に、彼は生れ故郷に於いて、市長邸を掻きまはしてしまふのである。彼はその爲めに市長夫人に戀をもちかける。この戀も彼にとつて闘争の一部分なのである。第二に彼はこの地方の大都會へ出て、當時貴族と並んで最も勢力の中心をなしてゐた僧侶の巢、神學校へ入る。そして第一の場合と同様に、箇々の生徒から

僧正の心に至るまでをしつかりと捉へてしまふ。第三に彼は巴里へ出る。これが最後の舞臺である。そこで彼は當時非常に勢力のあつた一侯爵家へ入つて、この邸で一番勢力家の令嬢の心を捉へてしまふ。かうして彼は着々と貴族と平民との間に築かれてゐた高い牆壁をぶちこはすのである。

彼の計算は實に正確である。その計算をなしとげるまでに彼は虚々實々の策略をめぐらして來たのだ。だが、その智謀にも拘らず、最後に割り切れない數字が出てしまふ。そしてこれが彼の身の破滅になるのである。

とにかく讀者は、『赤と黒』を読みながら、主人公のあまりに執拗な憎しみと駢け引に極度の反感を持つに違ひない。たとへば市長夫人や侯爵令嬢を口説き落とすところである。しかも、休まずに読みつづけるうちに、その憎悪と策略があまりにも整然と組織され、一分の隙もないことに驚嘆されるに違ひない。事實譯者も、はじめてこの作に接したとき、主人公を憎んでいゝのか、尊敬していゝのか、しばらく茫然とした位である。とまれ、當時一般から大して顧みられなかつたこの作品の主人公ジュリアン・ソレルは、オセロオが『嫉妬』の代名詞になり、タルチュップが『偽善』の代名詞になつてゐるやうに、今では『野心家』の代名詞になつてゐる。

私はこの書を一九二二年に一度翻譯してやはり新潮社から出版した。その後、譯文の上に非常に多くの誤りや拙さがあるのを發見したので、屢々改譯を思ひ立ちながら、遂に今日まで果し得ないでゐた。今回、この『世界文學全集』へ入れるに就ては、殆んど毎頁舊譯本の跡を止めぬまでに筆を入れた。(佐々木孝丸)

目次

前

編

.....一

後

編

.....三八

カザールの繪は、ヴェーリエールの教會堂で、ジュリアンがレリーフ夫人を拳銃で狙ひ撃つところ。(四五二頁)

赤と黒

スタンダール作
佐々木孝丸譯

前編

一、小都會

數千人を束にして捕へよ、

餘り虐待しすぎないやうに、

されど牢獄は愉快であつてはならぬ。

——ホップス——

ヴェーリエールの小さな市は、フランシュ・コンテ地方の一番綺麗な市の一つに數へることが出来る。赤瓦の尖つた屋根を持つた白い家が、小山の斜面に擴がつてゐる。そしてその小山に植つてゐる強壯な栗の樹の叢林が、地勢の變化を極く些細な點までもはつきり示してゐる。往時西班牙人の手によつて建てられ、今では廢址になつてゐる市の要

砦の下を、數百呎ばかり離れて、ドゥーブ河が流れてゐる。ヴェーリエールは、その北の方をデニラ山脈の支系の一つである高い山によつて護られてゐる。ヴェーラ山の樹木の多い頂きは、十月の初霜の頃から、早くも雪に覆はれる。山から落下する一條の奔流は、ドゥーブ河へ躍り込む前に、先づヴェーリエールを貫いて、多くの木挽場へ動力を供給してゐる。これは頗る簡単な工業で、而もこの市の住民——都會人といふよりも田舎者と云つた方が良い——の大部分のものに、一定の安穩さを與へてゐるのだ。だが、この小都會を豊かにしたのは、それらの木挽場ではない。ナボレオンの失脚以後、ヴェーリエールの殆んど全部の家が、その表構へを改築した程、一般の景氣を良くさせたのは、ミュールーズ染と呼ばれてゐる染布の製造であつた。

ところで、誰でもこの都會へ第一歩を踏み入れるや否や、忽ち怖ろしい形をした、やかましい響をたてる一つの機械の轟音に惱まされずにはゐないであらう。二十個の重々しい鐵槌が奔流の水力で廻つてゐる一つの車輪に依つて、劇

しい響きを立てながら上下に動かされ、その度に街路の鋪石までが震動する。この鐵槌の一つ一つが、毎日、幾千となく數へ切れない程の釘を製造するのだ。この巨大な鐵槌の下へ、忽ち釘に變化する鐵屑を差し入れるのは、若い血色の良い可愛い娘さん達の仕事だ。見たところ、非常な荒仕事のやうに思はれるこの仕事は、佛蘭西とエルヴェシー（スイス）とを距てゐる山嶽地方へ初めて分け入つて來た旅人を、一番驚かせるもののうちの一つである。大通りを登つて行く人々の耳を聳（も）つするこのすばらしい釘の製造所が、一體誰のものであるかといふことを、ヴェリエール市へ這入つて來た旅人が誰かに訊ねたならば、人はのろ／＼語尾を引つ張つた口調で答へるであらう。

「へえ、こりやあ市長様のものでさあ。」

ドゥーブ河の岸から小山の頂きまで爪先登りに續いてゐるこのヴェリエールの大通りで若し旅人がほんの暫く足を停めるならば、恐らく九分九厘まで、忙しさうな勿體振つた様子をした一人の大男が現はれるのを見るであらう。その男の姿を見ると、誰の頭からも大急ぎで帽子が脱（は）れる。灰色の頭髮をして、灰色の衣服を身につけてゐる。彼はまた色々な等級の勳章を持つてゐる。その額は廣く鼻は鉤なりに曲つてゐる。全體としての彼の顔には、一定の

規則正しさが無いではない。そればかりか、一目見たところでは、田舎の市長さんらしい、質祿の上に、五十歳前後の人の間で時々見掛けるあの樂天さが加味されてゐるやうにすら思へる。だが巴里からの旅人は、すぐにこの男の、何となく抑へつけた所と幾らかわざとらしい所とが交り合つた已惚（よこしま）つ氣の多い慢心した様子を見て氣を悪くする。で結局、この男の才能は、他人に債務を負はせた場合には飽くまで正確に支拂はせ、自分が債務を背負つた場合には、出來るだけ支拂ひを長引かせるといふことだけに盡きてゐることが感じられる。

ヴェリエールの市長レーナル氏は斯の如き人物なのだ。勿體振つた足取で街を横切つてから、彼は市役所へ這入る。そして旅人の眼から消え去る。が若しこの旅人が猶ほその上歩き續けるならば、彼は百歩ばかり登つて行つた處で、かなり美しい外觀をした一軒の家と、そしてその家に接した鐵の柵門の間から見える、すばらしい庭園とを見付けるであらう。其處からは、眼を喜ばせるために作られたかのやうな、ブルゴーニュの丘陵で出來た地平線一帯が望まれる。この眺望は、段々鼻持がならなくなりかけてゐる雰圍氣——金錢上の小さな利害關係ばかりに毒されてゐる雰圍氣——を旅人の頭から忘れさせる。

旅人は、この家がレーナル氏のものであるといふことを教へられるだらう。ヴェリエールの市長が、この美しい切石の住宅を最近に建築し終つたのは、全く、彼の大きな釘製造所から上る利益のお蔭である。噂によると、彼の一門は、その昔西班牙人であつたとのことで、猶ほ、吹聴されてゐる通りだとすれば、ルイ十四世の征服よりもずっと以前に、この地方へ居を定めてゐたのださうだ。

一八一五年以後、彼は工業家であることを恥ぢるやうになつた——一八一五年は彼をヴェリエールの市長たらしめた年だ。一段二段と順繰りにドゥーヴ河の岸迄降りて行つてゐるこのすばらしい庭園の色々な部分を支へる高臺附の石垣も鐵の取引に關するレーナル氏の知識の賜なのだ。獨逸のライプチヒやフランクフルトやニュレンベルクやその他の工業都市を取り巻いてゐるあの繪のやうな庭園を、この佛蘭西で見付けようとしても、それは見當違ひだ。フランシユコンテでは、石垣の數が増せば増す程、次々と順繰りに列べた石の列で自分の所有物に蔽ひをすればする程、益々隣人の尊敬を受ける權利を得てゆくのである。石垣に満たされてゐるレーナル氏の庭園は、その土地の幾分か、金で買ひ取られたものであるといふので、さうに尊敬されてゐるわけだ。たとへば、屋根の上一ぱいに張り付

けた板の上へ、途方もない大きな字で、「ソレル」と云ふ名を記してある、あのドゥーヴ河べりの木挽場は、あんまりその位置が變挺なので、ヴェリエールへ這入つて來るものを先づ喫驚させるだらうが、この工場なども、今ではレーナル氏の庭園の第四番目の高臺の石垣が立つてゐるその同じ場所を、つい六年前まで占領してゐたのだ。

威張屋の市長さんも、頑固で片意地な田舎者のソレル爺さんには、ずるぶんと手古擦らされたものだ。工場を何處か他處へ移して貰ふために、彼は、無駄な金をウンと使はせられた。ところで、工場へ通じる「公共溝」の問題だが、これは、レーナル氏が巴里で得てゐる信用を利用して流れを迂回させることが出來た。彼は、千八百二十某年の選舉のお蔭でこの恩澤に浴したのだ。

彼はソレルに對して、五百歩ばかり下流のドゥーヴ河岸へ四倍の土地を與へた。で、この位置は、樅板の取引をするにはずつと便宜であつたにも拘らず、ソレル爺さん（彼が富裕になつた時から人々は斯う呼んだ）は、「所有者の偏屈」と短氣とを振りまはして市長をじらせ、六千法と云ふ金をせしめるやうな祕策を弄したのであつた。

尤もこの協定は、土地の物議り連から兎角の批評を蒙つたものではあつた。四年ばかり前の或る日曜日のことであ

つたが、市長の制服を着けて教會から歸つて來たレーナル氏は、三人の息子に取り巻かれたソレル爺さんが、彼の姿を眺めながら北叟笑んでゐるのを遠くから認めた。この北叟笑は、市長さんの魂の中へ、あの致命的な日のことを呼び起した。でそれ以後彼は、あの交換取引が、もつとウンと安く出來た筈だつたのといふことを考へるやうになつた。

いくら澤山の石垣を建てても、ヴェーリエールに於て、一般の尊敬を受けるために何よりも先づ心得ておかねばならぬことは、春先になると巴里へ行くためにデュラの峡谷を横切る石工達が、伊太利から持ち込んで來る設計なんぞを、決して採用しないと云ふことである。そんな新式な建前でも用ゐようものなら、その無分別な普請狂は、永久に「根性曲り」といふ名で呼ばねばなるまい。そして、フランシ・コロンテに於ける尊敬を分配する役目の事なかれ主義の分別屋連から、絶対に信用を失はねばなるまい。

全くのところこの分別屋連は、この地方で、不愉快極まる「專制主義」を實行してゐるのだ。巴里と呼ばれてゐるあの偉大な共和國で生活したものとつて、田舎の小都會での滞在が我慢ならないのは、全くこのいまはしい言葉のお蔭だ。輿論の專制——しかも何たる輿論だ！——なるものは、佛蘭西の小都會にあつても、やはり距米利加合衆國

に於けると同じやうに「愚の骨頂」だ。

二、市長

威嚴！ そんなことは何でもないぢやありませんか？ 愚か者から尊敬され、子供から感嘆され、金持から羨まれ、賢者から見下げられて。

——バルナーヴ——

爲政者としてのレーナル氏の名聲にとつて幸ひなことにはドゥーヴ河の流れから百歩ばかり上の丘陵に沿うてゐる遊園地に、巨大な「防水壁」が一つ必要であつた。元來この遊園地は、佛蘭西中でも一番美しい眺望を恣にするこゝとが出來るやうな素敵な位置にあるのだ。ところが、毎年春先になると、雨水のためにこの遊園地に敵が出來、其處此處に窪地が出來て、折角の遊び場が毫無しになつて了ふのであつた。誰の胸にも感じられてゐたこの不便さは、遂にレーナル氏をして、遊園地のために高さ二十呎、長さ七八十米突の防水壁を建てさせ、その施政を不朽なものにさせる絶好の必然性を與へたのである。

前々内務大臣が、このヴェーリエールの遊園地を親の敵